名無しの影使い

サソリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
名無しの影使い

【Ｎコード】
Ｎ４１９５Ｚ

【作者名】
サソリ

【あらすじ】
ある日、目を覚ますと自分が何者なのか覚えていなかった少年魔導士のお話。

原作、設定を遵守しませんので御注意下さい。

プロローグ（前書き）

フェアリーテイル～影～第一章の再構成版になる予定です。

プロローグ

「……ん……」

ゆっくりと重たい目蓋を開けると、爛々と輝く太陽に雲一つない青い空が見えた。

近くに川があるのだろうか、静かに水が流れる音が聞こえる。

あぁ、落ち着くな

久しぶりだ、こんなに暖かい自然を感じるのは……それにしても中々にリアルな夢だな。

このままでは任務に行く気がなくなるよ。何時までも、このまどろみの中に居たい。

……しかしそう言うわけにもいかんだろう。早く夢よ、覚めないか。私は■■しないといけないのだから……。

そう考えると、私はゆっくりと目を閉じ、暖かい自然が溢れる夢の世界に別れを告げた。

…

…

…

……はずだった。

次に目を覚まし、目蓋を開けた時に見えた光景は爛々と輝く太陽に雲一つない青い空だった。

……あぁ確信したね、これは夢じゃない。

体を温める太陽の光に突き抜けるそよ風。

そして寝転がっている体を包み込んでくれず、痛みつけるかのように固く自己主張する岩盤。

手を延ばせば、ぴちょんと水に触れた。流れているから川か？……冷たいな。まさか、こんな近くにあるとは……。

それにしても、夢がここまでリアルなものか。

「はぁ……どこだよ……ここは……」

ゆっくりと上半身だけ起こす。すると私の目には覆い茂る木々と清流のごとく流れる川が見えた。

……知らない場所だ。

それにしても、よくこんなにゴツゴツした岩盤で呑気に寝ていられたものだ。

体のあちこち痛いぞ。しかし、しかしだ、今はそんなことはどうでもいい。

何故こんな場所にいるのだ。それにこんな真っ黒なスーツなんぞ着ていたか？

私は■■■■にいたは……あれ？……■■■？いや■■■■……？……？……私はどこにいたんだっけ？

…それより私は何者だ？私の名前は？

…

…

…思い出せないだと……

……まさか記憶喪失だとでも言うのか？

いやいや、ただ気が動転して混乱しているだけだろう。もう少し冷静になって考えてみよう。

自分の名前ぐらいはすぐに思い出せるだろうよ。

そう考えた私は岩盤に寝転がったまま、思考に没頭する。

……しかし……一向に自分自身のことは何も思い出すことは出来なかった。

……ややこしいことになった……。

……しかし、しかしだ。そう焦ることはないな。川や木のことが分かるんだ。と言うことは一時的な記憶喪失だろう。

……まぁ、何時か思い出すさ……

それより、これからどうするかだな。このまま寝転がっていても意味はないし、ウジウジ考えていてもどうしようもない。

今は、現状の把握をしなければ二進も三進もいかない状態なのだ。ここがどこであるかも分かっていないからな。

さて考えるより即行動だ。そう考え、立ち上がった私は、辺りを見回したが自然以外何もなかった。

人工物がない、どこかの森みたいだな。何故ここにいるかはわからないが

【ぐぅ〜】

……探索の前に、まずは腹ごしらえをするか。

ふむ、ちょうど川辺にいるんだ。魚でも食べるとするか。

そう思考しながら川をじっと眺めると、光に反射されて私自身の姿が映し出された。

肩口まで伸びた真っ白な髪に、赤色の瞳……。男とも女とも取れる子供のように幼い顔立ち。１２０センチほどの小さい身体。

……誰だコイツ……

って、それを考える前に飯だ、飯。腹が減っては何もできないからな。

思考を逸らし、川を眺めると魚が泳いでいるのだろう。いくつかの魚影を見つけることができる。

よし、食べ物は豊富にあるようだな。これで一安心と言ったところだ。

さて魔法でも使って……ふむ……魔法のことは忘れていないようだ。何とも都合の良い記憶喪失のようだな。

…　…　…

と言うか覚えていないのは自分自身のことだけみたいだな。

っとそれより飯だ。はてさて、魔法はきちんと発動するかな？

【影槍】

ぼそっと小さく呟き、黒光りする魔方陣を足元に展開させる。

すると、その行為によって絶命した魚が、ぷかぷかと浮かんできた。

どうやら魔法は正常に発動し、魚影から漆黒の槍が飛び出して、見事に魚の真ん中を貫いたようだ。

すでに絶命し、影槍によって幾らか体を失い軽くなった魚は沈むことなく、ぷかぷかと浮かんでいる。

「ふむ、一丁上がりというヤツだな」

そしてまた魔方陣を展開させる。次は自分の影から、にゅるにゅると漆黒の手を数本出す。

そして浮かんでいる魚の所まで長く伸ばし数匹の魚を回収した。

ふむ、上出来、上出来♪

さてお食事の時間だ♪

「いただきま～す！！！」

…

…

…

「……知らない天井だ」

またしても知らない場所にいる。どこだ、ここは……

確か私は魚を食べて……から記憶がないな。

「やっと起きたかい」

私が知らない天井を見つめ……いや天井でもないな。あれは木？もしや……ここは木の中なのか？何とも辺鄙な場所にベットを置いてるものだ。

「聞いているのかい？」

「っ！？……む……何だ、誰だおまえは……」

いきなり喋り掛けられたからビックリしたじゃないか。てか誰だ？この婆さんは……。

私にいきなり話しかけてきたのは、Yシャツと長いスカートの上に真っ赤なマントを羽織っている婆さんだった。

ピンク色の髪の毛を頭の後ろでお団子にして金色の髪飾りで止めている。

たぶん若い頃は美人だったろう。

「命の恩人にその態度は酷いもんだね。こちらこそ聞くよ。あんた何者だい？」

「……命の恩人だと？私は助けられた記憶などないが？」

「あんた、あの川の川魚を生で食べただろう。あそこの川魚は毒を持っていてね。……ワタシが偶然通り掛からなかったら、あんた今頃あの世行きだよ」

むっ……そう言えば少し思い出してきたぞ。

確か魚を食べて苦しかったような……ということはこの婆さんの言うことは本当のことか？

しかし、人に出会えるとは運がいい。これで現状がわかるな。

「そうか。礼をいってやる。ところで、おまえは誰だ。ここはどこだ。さっさと答えないとぶち殺すぞ？」

「……礼儀がなってない子供だね。しかもなんて口の聞き方だい！」

「おい、ババァ？聞いてんのか？お前は誰だと聞いているんだ！」

「相手に聞く前に自分が名乗るのが礼儀だと知らないのかい！」

ちっ、それぐらいで怒ってんじゃねぇよ。短気すぎじゃないのか、この婆。

つか……名前か……覚えてねぇんだよな。ふむ、偽名でも名乗るか。

うーむ

……

……

……

……

……

……はっ！？

これだ！この名前しかない！！！

「私の名前は、ナナシだ」

「……あんた、舐めてんのかい？」

何！？なめているだと？一生懸命考えた名前だぞ。

「本当のことだ。何だその眼は？人様の名前に文句あんのか？あぁ？」

「はぁ……じゃあ家名はなんだい？」

「ネームレスだ！」

「……」

何だ、婆さん？そんなに私の目を見ないでくれ。……恥ずかしいじゃないか。

「あんた……もしかして記憶がないのかい？」

「な、何故それを！？」

心を読んだのか！？コイツァ驚いた！？

「はぁ、厄介な生き物を拾ってしまったよ。それにネーミングセンス無さ過ぎだ、この子供は……」

何だ、そのやれやれみたいなポーズは……。

「それよりもお前の名前は何だ。私は答えたんだ。さぁ言え！【ご

ちん！！】ぎゃっ！？」

「さっきから年上に対して礼儀がなってないよ！」

ぐおぉ、何て力で叩きやがる。コブが出来るじゃないか。いや既に出来て来てるじゃないか。

ぐおぉぉお、

ジンジンするぅ

「……ワタシの名前は■■■だ」

「あん？頭さすってたから聞いてなかった…もう一回言え「何だって？」……ってください。お婆様♪」

恐怖！？そんな目で睨まないでくれよ……それにしても何て目だ。きっと他の人間にも恐れられてんぞ、この婆さん。

てか、この婆さんには逆らわない方がよさそうだな。命がいくつあっても足りないような気がする。

「まぁ、いいだろう。ワタシの名前はポーリュシカだ」

……ポーリュシカ……知らない名前だ。

「そしてここはフィオーレ王国にある森の中に作られた私の家だよ」

フィオーレ？

……そんな国、聞いたことないぞ。

どこだ、ここは！？

虚ろ（前書き）

～影～とは違い年代とか矛盾があるでしょう。

虚ろ

婆さんに拾われて数ヶ月が経つ。

最初は知らない国で暮らすことは戸惑いも多かったものの、さすが私と言えよう。

たった数ヶ月で大分ここでの暮らしにも慣れてきた。

既に婆さんの家は私の家同然だ。しかし、しかしだ。記憶の方はさっぱりなんだ。

残念ながら全くと言って良いほど、何も思い出すことは出来ないのだ。

思い出すために色々と試行錯誤はやっているんだ。

朝の森林浴は日課だろ。それに昼はベッドでゴロゴロ。夜は瞑想などをしている。そしてご飯は満腹になるまで食べている。

むぅ……これだけ一生懸命に頑張っているのだが、一向に思い出す気配はない。

くそぅ！頑張っているのに！どうして！

そんな風に毎日が大変な私である。ちなみに現在は初めて目を覚ました場所。つまり川がある場所で森林浴をしている。

空にはたゆたう雲が流れ、そよそよと吹く風が心地良い。

あぁ、記憶を思い出しそうだ。

「……あんた、働きな……」

「え？」

そんな風にいつも通り頑張っていると、婆さんの声が聞こえた。

「……何だ、幻聴か……」

「もう一度言うよ。あんた働きな」

「はい？」

どうやら幻聴ではなかったようだ。私の視界には無表情で何やら目つきが怖い婆さんがいた。

……

……

……

爛々と太陽が照り、雲がたゆたう朝の時間。
フィオーレ王国にある東の森にはナナシとポーリュシカがいた。

「……なんだ幻覚か……」

虚ろな目で空を見上げていたナナシは、ポーリュシカを見てそう呟くと再び空を見上げ始めた。
それを無言で見ていたポーリュシカはつかつかと歩み寄り拳を握ると

「痛っ！？」

ナナシに向けて振り下ろした。

「あにすんだ！ババァ！」

涙目で叩かれた頭を抑えているナナシは口を開くが

「毎日、毎日、グータラグータラ！少しは働いたらどうなんだい！」
「馬鹿やろう！私は記憶を思い出そうと頑張っているんだよ！見てみろよ、この気合いの入った目を！」

「……虚ろだね。あんたは記憶喪失を逆手に取って働きたくないだけだよ。言い訳はいいから来な！」

「違っ！？本当に記憶を思い出そうとぉ！痛い痛い痛いっ！？やめて！」

小柄な体であるナナシは抵抗らしい抵抗も出来ずにポーリュシカに引きずられて森の奥へと消えてしまった。

その後、とある木の家では

「嫌でござる。働きたくないでござる～」

「駄々をこねるんじゃない！さっさと薬草を集めて来な！」

と言う会話があったとかなかったとか。

認識（前書き）

この時期のナナシはまだまだガキですので～影～を読まれている方は違和感があるかも

認識

「だぁ！薬草なんぞ知るか！見付けれる訳がねぇだろうが！」

とある日の午後。分厚い本を片手に森の中を歩くナナシの姿があった。

「円月草だぁ！？んなもん。どこにもねぇじゃねぇか！くそが！」

開かれたページには、薬草らしき絵と説明が書いてある。どうやら、それを見ながら薬草を探しているようだ。

「大体、私には記憶を思い出すと言う使命があってだな。こんなことをしてる場合では……」

ぶつくさと文句を言いながら探すナナシであったが、一向に目的の薬草は見つからなかったのである。

「ダメだ……今日は諦めよう。適当に嘘付けばバレねぇだろ」

……

……

…

あ～はいはい。薬草なんて見つかりませんでした。

大体、薬草の知識なんざないんだよ。こんな絵が書かれた本だけで探すのは無理だっつーの。

ったく、あの婆め！

帰ったら満腹になるまで飯を食ってやるからな。

見てろよ、肉を食っ……ん？誰だ、アイツ。

私が婆さんの愚痴などを呟きながら歩いていると、婆さん家の前に誰かいた。

……白髪に身長は私より低い、年老いた老人だ……。

誰だアイツは？こんな森の奥で婆さん以外の人間は見るのは初めてだ。

婆さんは人間嫌いらしいからな。あまりと言うか全くと言って人間と接しないのだ。

ん？あれ？そう言えば私は大丈夫なのか？

もしかして私は人間と認知されていないのか！？

ひ、ひでぇ。

……だから穀潰しだの。グータラだの。ズボラだの、言われるんだな……。

くそぅ、私を人間と認めさせてやる！

そのためにも何か人間として確立していることを実証しなければ！

「はっしょん！」

む……思考が逸れていた。ジジイのクシャミのおかげで現実に戻れたようだな。

ふむ……ところであのジジイは誰だ？

婆さんに友がいるのは有り得ない。また婆さんを訪問するのも有り得ないだろ。

人間との触れ合いは街の店員とかぐらいしか……。

……ま、まさか、婆さんのストーカーか！？

さっきも言ったように婆さんも時々、街に買い物に出るからな。そう言うことは無いとは言えない。

こ、コイツァ、特ダネだよ！ストーカーなんて初めて見たぞ！

むっ？よく考えると、これはチャンスではないか？

そうさ！あの怪しいジジイを倒せばいいんだ！そうすれば婆さんも私に感謝して薬草探しをさせなくなる。

うむ、そうと決まれば即実行だ。

ふっふっふ、私は接近戦が得意なのだ。気絶させてボコボコにしてやんよ。

【転影移！】

そう小さく呟き、自分の影に沈むとストーカージジイの影へと転移した。

…

…

…

影へと潜ったナナシは老人の影からぐぷりと姿を現した。一方、小柄な老人はナナシが姿を現したことに気付いていない。

どうやら気配を感じ取ることができないぐらいにナナシの隠密性は高いようだ。

小柄な老人は終始、鼻水が垂れてくる鼻を啜っている。どうやら風邪を引いているらしい。これも気付くことが出来ない要因の一つだろう。

一方、ナナシは影から鈍色な光るナイフを取り出すと、柄の部分を躊躇なく小柄な老人に向けて横薙ぎした。

（気絶しろ♪）

その行為は淀みなく、小柄な老人の首筋に向かっていたが

「マスター危ない！」

「むっ？おおっ！？」

もう少しで首筋に達しようとした時、どこからか少女の疳高い声が響き、小柄な老人はナイフを寸前で避けることが出来た。

「ちっ」

避けられたことに舌打ちをしたナナシは、後方に下がろうとするが

「あ？」

背後から接近した誰かが剣を振り下ろしていることに気付き、そのまま振り返ることなく

「マスターを狙った曲者が！」

【ガキン！】

急いで影から出し、もう片方の手に持ったナイフで受け止めた。

ガチガチと銀色に輝く剣と鈍色に光るナイフの鍔迫り合う音が響く。

（前にはジジイ。後ろには……）

瞬時に頭を回転させ状況を理解したナナシは、

「ふっ」

小さく息を吐いて力を抜き、鍔迫り合いに負けたように見せ掛け

「おら！」

再び体を半回転させながら、勢い良く腕を振り剣を弾き返した。

ガキンっ！という疳高い音が響く。ナナシは鍔迫り合いを征したが、油断することなく体勢を取りながら睨む。

「……ガキだと……」

そこにはセミロングの赤髪の少女が居た。髪は三つ編みにしている。

そして上半身に鎧を付け、下半身にはスカートを纏っていた。

また少女は弾かれた剣をなんとか握っているが、手が痺れているのか苦悶の表情を浮かべていた。

「エルザ！」

マスターと呼ばれた老人は少女の名前を言い、お返しとばかりに、少女エルザは

「ここはお任せを！マスターを狙った不届きものは私が排除します

！」

そう言い、弾かれたことによって崩れた体勢を立て直しながらナナシに剣を向けた。

認識（後書き）

短くてすみませんが、こんな感じでお送りすると思います。

前回も今回も書き下ろしなので後から修正します。

エルザｖｓナナシ

対峙するナナシとエルザの二人であったが、対峙する時に流れる特有の静けさが漂う前に

「あ？不届き者だと？ふざけんじゃねぇ！ここは私の家だぞ。不審者が！」

そう叫んだナナシによって戦いは始められた。ナナシは腰を落とし、素早く動きながらエルザに襲い掛かる。

「おらよ！」

「くっ！？」

左手で刃渡り１５センチほどのナイフを振るい、刺し、時には薙ぐ。

その度にエルザも同様に払い、穿ち、時には避ける。

「はぁ！」

「おらっ！」

エルザが振るえば、ナナシも振るう。その逆もしかり。

ガキンと何度も打ち合い時折、火花が迸りながら戦いは熾烈を窮め始めた。

（ちっ、拉致があかないな）

だが、まだ序盤であるにも関わらず、勝負が着かないことにイライラし始めたナナシは新たに動き出した。

「しっ！」

一度打ち合いを止めると、後方に下がりながら、素早く右手に持ったナイフを投げたのだ。

ナイフの軌跡は真っ直ぐエルザに吸い込まれるように向かってくる。

「むっ」

エルザは突如、飛来して来たナイフを剣で弾き飛ばす。そして再びナナシに接近しようとした時

「おせぇよ！不審者！」

【影槍！】

「なっ！？」

ナナシがそう唱えるとエルザの足元に出来た影から漆黒の槍が飛び出した。

【ガギッ】

すると、すぐに何かがぶつかり合う鈍く小さな音がした。

「し、しまった！？剣が！？」

それはエルザの剣が根元から砕け壊れた音だった。

影から飛び出した鋭く尖った槍が剣の柄を貫き、刃と柄を切り離したのだ。

それを見たナナシは勝負が着いたと感じたのだろう。

不敵に笑い、器用にナイフをくるくると回しながら喋り掛ける。

「格好、装備からして、お前は剣士だよな。剣無き剣士は何が出来る？」

「何？」

「降参した方が身のためだぞ。不審者が！」

そう言い再び襲い掛かろうとするが

「フェアリーテイルの魔導士を舐めるな！」

【喚装！】

そうエルザが唱えると、虚空からすぅと一本の剣が出てきた。

先程エルザが持っていた剣と全く同じものだ。それを素早く掴んだエルザは剣を振るった。

「はぁ！」

「魔導士だと！？」

余裕を出し笑みを浮かべたまま接近していたナナシは、剣を虚空から出したエルザに驚き、反応が遅れ攻撃を許してしまった。

「ちぃ！？」

ギリギリで避けるものの何本か切り取られた髪がはらはらと舞い落ちる。

（あ、危なっ！？）

額に汗を欠いたナナシはエルザに喋りながら睨み付けようとするが

「まさか魔導士だったとは思わなかっ「ふん！」ぎゃぴっ！？」

エルザはナナシの言葉を聞くことなく、剣の柄で頭を叩き、いとも簡単に気絶させた。

「……ぁー……」

地面に倒れたナナシはピクピクと動いているが、一時の間は目を覚ますことはないだろう。

何とも呆気ない結末の戦いであった。

「全く、手こずらせて」

「何者かの？ズズッ」

今までエルザ対ナナシを傍観していた老人は鼻を啜りながら近付く。

「分かりません。ただマスターを狙ったことだけは判明しています」

「う〜む」

風邪の為だろう。顔を赤くさせ鼻水を垂らしながら悩む老人だったが、

「あっそう言えば……ここは自分の家だと言っていました。しかしここはポーリュシカさんの家のはずです」

（うむぅ、自分の家？ポーリュシカの？……まさかの……）

ふと、エルザが思い出した内容に老人が思考しようとした時

「人ん家の前でドンパチとは度胸があるね。マカロフ」

木で出来た家から扉を開けてポーリュシカが出て来た。

その顔は非常に不機嫌そうに歪められている。その姿に老人マカロフは冷や汗を流す。

「よ、よぉ。久しぶりじゃな、ポーリュシカ。実はの、この小僧が……」

「その子は私の預かり子だよ。全く、バカな子なんだから。バカに付ける薬はないからね。そのまま寝かしときな」

「ほぅ、お主が子を世話とはのぅ。いやいやまさか……のぅ？」

「……あんたも風邪を引いてバカになったようだね。早く入りな！風邪なんかで死にたいのかい！」

何か含みのある言い方をしたマカロフに、片眉を上げたポーリュシカはそれだけを言う。

そして扉を開けたままイラついたように歩き、家の中へと入っていった。

その背中は言葉通り、早く来いと語りかけているようだ。

対してマカロフは

「そ、そ～怒るな。待つのじゃ、ポーリュシカ！おぉ、エルザよ、その子を頼むぞぉ～」

「は、はい」

慌てながらポーリュシカを宥める言葉を発した後、隣に佇んでいたエルザにナナシのことを頼むと家へと入っていった。

「全く、どうして私が……」

残されたエルザは、はぁと溜め息を吐いた。

「あれぐらいで気絶するとは……全く……世話が掛かる奴のようだな……」

気絶したナナシの顔を見ながらそう呟く。そして、まだ少し痺れる手でナナシの足を掴み、ズリズリと引っ張りながら家へと入っていった。

エルザｖｓナナシ（後書き）

短くてすみません。次からは日を開け、纏めて出します。

記憶（前書き）

ナナシは子供の時はハイテンションです。

記憶

現在は陽が沈み掛け、茜色に空が染まり始めた時間である。

小一時間前に自室で意識を取り戻した私は、すぐに起き上がり、婆さんが無事か確認しに走った。

痛む頭と体を抑えて……。

すると、すぐに無事な姿の婆さんを発見したのだ。何とか飯は食えるようだ、よかった。

……しかし安心した束の間……。

『そこに座りな。正座だよ』

『えぇー』

すぐに婆さんから事情の説明と有り難くない説教を頂戴したのだよ。理不尽だ！と思いつつも話を聞いてやっていると色々と情報を収集することが出来た。

その中で一番驚いたのは、ストーカー爺さんが婆さんと旧知の仲であると言うことだ。

まさか、婆さんに友が居たとは……。私にとっては驚きの何モノでもなく、何度も聞き返していたら叩かれてしまった。

しかし叩くのは酷くないか！ちょっと１０回ほど聞き返しただけではないか！

全く、あの婆さんは短気なんだから、困ったものだよ。

おっと、話が逸れていたな。

ストーカー爺さんの名前はマカロフ・ドレアーと言う。

何か偉い人なんだとよ。確か……フェアリーテイルだったかな？そこの魔導士ギルドのマスターだそうだ。

魔導士ギルドとは魔導士達の集まる組合で魔導士に仕事や情報を仲介する場所らしい。

まぁ私には何の関係も縁もない場所なのは明白だな。

ちなみに、忌々しいが私を接近戦で倒した女は、フェアリーテイルに所属する魔導士だそうだ。

女の名前はエルザ・スカーレット。年は１２歳。

爺さん曰わく将来が楽しみな人物らしい。

そして爺さん達の話を聞いた後、私も自己紹介してやったのだが、

『『偽名か？』』

と、二人同時に言いやがった！

偽名じゃねぇやい！本当の名前だ！何て失礼な奴らだ！

婆さんも何か言ってやれ。と話を振ったらネーミングセンスがないだの。

普段からグータラしてるからだとか、何故か説教が再開してしまったのだ。

全く持って意味が分からない。何故あそこから説教に行くんだよ？

私の名前は分かりやすくて最高じゃないか。

婆さんこそネーミングセンスがないのではないか。世の中、間違っていると思う！

「聞いているのかい！」

おっと、まだ婆さんの説教は続いていたのだった。

「ちゃんと聞いてたっつーの！」

「……本当かい？……」

「当たり前だろうが！」

私がそう答えると婆さんは訝しげに此方を見てくる。全く、失礼な婆さんだ。

「……じゃあ、今までのように散発的じゃなくて、明日から毎日、薬草採集をしてもらうからね」

「聞いてないぞ！？あぶんっ！？」

「やっぱり聞いてないんじゃないのさ！それに今日頼んだ薬草はどうしたんだい！」

「しょ、しょれは～」

婆さんの口から信じられない言葉が飛び出し、驚愕の声を上げると、ビンタされてしまった。

い、痛くてマトモに喋れない。

「どうせ見つけ切れなかったんだろう？今すぐ探してきな！」

「ちょっ、わたひのはなひを」

「言いかい。見つけてくるまで戻ってくるんじゃないよ」

「きひてく……おひゃっ……」

言い終わった婆さんは私の言い訳を聞く前に首根っこを掴むと、外へと放り投げやがった！

「いきなりひゃにすんだ【バタン】……よ……」

抗議の声を上げるも、その前に扉はぴしゃりと閉められた。

今から薬草採集だと！？

待て待て待て、今は夕方だぞ！もう暗くなっているのに見つけれるわけがないじゃないか！？

…

…

…

ナナシを外に投げたポーリュシカは溜め息を吐きながら椅子に腰を降ろす。

「面白い子じゃの」

「何が面白いもんさ。毎日、あの調子だよ。子供のお守りは大変さね」

呆れた表情で対面に座ったマカロフにそう答えるとテーブルに置いてある紅茶を啜る。

マカロフは今だに鼻水を啜っていることから、風邪はすぐに治らないようだ。

「大変ならウチのギルドで預かってもよいぞ？」

「駄目だね」

「ん？何故じゃ？」

「あの子は実質、生まれて数ヶ月しか経っていないんだ。言動もしっかりしてないから大衆の中は無理さ。最近ようやく、人間として安定してきたんだ。あと一年はじっくり育てる必要があるよ」

「しかし、お主と森の中だけじゃったら成長はあまりせんじゃろ？年は大体、エルザ達と同じ頃じゃろうから同世代と居らせた方がよくないかの？」

「……私はギルドに入れるのは反対だよ。……まぁ、あの子の意思次第だがね」

そうポーリュシカとマカロフが話す間にも

『開けろー！横暴だぁ！』

ドンドンと扉を叩く音が聞こえてきていた。どうやらナナシは薬草採集に出掛けずに抗議をしているようだ。

そんな喧しい音や声を聞いて、席を離れていたエルザが帰ってきた。そしてエルザは眉を寄せながら尋ねる。

「うるさい奴だな。あの……ところでポーリュシカさん……」

「ん？どうしたんだい？」

「ナナシと言う名前は本当なのでしょうか？」

「残念ながら本当さ」

「……信じられません……」

「信じようが信じまいが、あの子がそう名乗ったんだ。あの子はナナシ・ネームレスだよ」

「……自分で名乗った……」

その言葉に疑問を感じたエルザは、頭を悩ましながら考えると、一つの答えを導き出したようだ。

「もしかして自分の名前が分からない？記憶喪失ですか？」

「さぁね。それはあの子に自分で聞くといいさ。それとついでにあの子の友になってくれると有り難いね」

「友……ですか？」

「知り合いは私しかいないからね。かと言って自分から友を作るような子じゃないからね。どうだい？」

「知り合いが一人しか居ないのは可哀想ですね。分かりました！マスター、少し席を外します」

「おぉ、行ってくるがよい」

ポーリュシカから頼まれたエルザは気合いを入れながら扉へと向かう。

「ん？」

しかし、ドアノブを握った所で何かに気付いた。

さっきまで聞こえていたナナシの声と扉を叩く音が聞こえないのだ。

しかも人の気配が全くない。

「諦めて採集に行ってしまったのか。早くいかねば見失ってしまう！」

そのことに気付いたエルザは慌てて扉を開け外へと飛び出して行った。

「ギルドには入れないよ。でも友は作った方がいいからね。あの子にとっては押し付けがましいけど、これでいいだろう？」

「たぶんの。エルザなら今日中に良き友になってくれるじゃろう。儂が保証するぞ」

「……まぁ、あの子を見付けることが出来るならの話だがね……」

「むっ？」

何か含みのある言い方にマカロフは疑問を感じた。

だがポーリュシカが指差す方向を見ると、すぐに答えを見つけたよ

うだ。

「……なんと……」

ポーリュシカの指先は床が示されており、その床には人影が出来ていた。

その不自然で不気味な人影はゆっくりと動き、部屋の奥へと進んでいた。

「あんた、薬草採集は終わったのかい？」

【ビクッ】

その人影にポーリュシカが尋ねると、ビクリと人影が揺れた。

「採集して来なかったら、当分の間は晩ご飯抜きだからね」

そう言われた瞬間

『ナンテコッタイ！？』

そう声を出すと人影は慌てたように扉を抜け、外へ飛び出していった。

「風邪を引いてるとは言え儂も気付かんとは……恐ろしいほどの隠密性じゃな。先程の奇襲と言い、一体何者だったんじゃ？子供にしては手慣れすぎておる」

「……さぁね……。私には、ただの子供にしか見えないね」

唖然としながらズズッと鼻水を啜るマカロフと、静かに紅茶を飲むポーリュシカであった。

……

……

……

ちくしょう！

せっかく影に潜り、こっそりと自室に帰るという計画を取っていたのに見つかるとは……相変わらず勘が良い婆さんだよ。

それにしても脅しは横暴だと思う。ましてや晩飯抜きなど残酷にもほどがある！

って、それより早く薬草を見付けねば、暗くなってしまうっ！？

急げ急げ急げ！

それから数十分、影の中から取り出した本を片手に探し回ったが、円月草を見つけることは出来なかった。

何故だ！本に書いてある通りの薬草なんぞ、どこにもないぞ！それに似た形の雑草ならあったが……。どこだ！円月草ぉ！

「むっ。やっと見つけたぞ！ナナシ！」

「……」

その時、ガサゴソと音がすると、茂みの中から野生の魔物が姿を現した。

魔物のくせに髪は赤いわ、鎧は着けてるわで、初めて見るな。どうやら新種の赤い魔物のようだ。

「おい！聞いているのか！」

こういう時は無視が一番である。目を合わせたらダメだ。さっさと円月草を探そう。

「円月草やぁ〜い。出てきておくぶべし！？」

「聞いているのかと言っているんだ！」

ちょっ、いきなりビンタだと！？

今日、初めて会ったばかりの人にそれは酷くないか！？

「クソアマ！いきなり何しやがる！？」

「私の名前はクソアマではない。エルザだ。さっき家で教えただろうが……」

「えるざ？誰だお前？魔獣エルザんの間違いではないのかぁ？」

「記憶障害がここまで酷いとは……全く、しょうがない奴のようだな……思い出させてやろう」

ん？何だよ？戦闘準備だと？

おもしれぇ！私だって女に負けるのは悔しかったんだ。次はボコボコにしてやんよ！

……

……

……

「私は誰だ？」

「え、エルザ様です」

「ちゃんと理解したようだな。あぁ、様は付けなくていいぞ。」

「は、はい！」

「それにしても捜したんだぞ」

「硬っ！？」

はっ！？今まで何を？

てか、私はエルザ様……ではなく、エルザに抱き寄せられているではないか。何だ、この状況は？

それにしても上半身に装備している鎧が頭に当たって痛い。自宅前の戦闘で怪我した所に当たって非常に痛い。二度攻めかぁ！

「痛っ。ちょっ、離せよ！」

「むっ……あぁ、いいだろう。それよりも頭は大丈夫か？記憶は思い出しそうか？」

私を離したエルザは心配そうな態度で語りかけてくる。

てか記憶喪失だと誰が喋ったんだ！？婆さんか？余計なことをしやがって

「おい、聞いているのか？今日から私達は友だからな。困っていることがあったら私を頼るといい」

何だ、コイツ。私達は今日初めて会ったんだぞ？いきなり友ってなんだよ。

て、てか何だよ、その心配していますみたいな目は！？

…

…

…

エルザが心配そうに見てくる様子に、調子を崩されたナナシはガリガリと頭を掻く。

「いや、お前に心配される筋合いはないんだが……てか友ってなんだよ？」

「記憶がないというのは大変だろう？それにポーリュシカさんに聞いたぞ。一人で寂しかったそうだな」

「いや、別に……」

「辛かったな。悲しかったな。もう私がいるから大丈夫だ」

「何の話だ？」

どうやらエルザの頭の中では、ナナシに記憶喪失かどうか聞く前に答えが出ていたらしい。

ナナシを捜す間に色々と妄想してしまったようで、既にエルザの目には記憶喪失者ナナシとして写っていた。

それにプラスして友が居ない寂しさに囚われている少年としても写っている。

どうやらエルザの頭の中で、かなり話が飛躍してしまったようだ。

「私達が出会ったのも何かの縁だ。記憶を取り戻すことに協力しようと思ってな」

エルザは胸を張りながらそう言うと

「これで頭を叩けば思い出すのではないか？いやこれか？いやいやこれだろう」

次々に武器を虚空から出現させて始めた。それを見ていたナナシは

「……こ、殺される……」

身の危険を感じ、顔を真っ青にすると、ガタガタと震え始めていた。

先程あった、しかしナナシは覚えていない戦闘の前に、悔しいと憤っていた姿は微塵も感じない。

いや、戦闘でよっぽのことがあったのだろう。既にナナシは悔しいさを忘れ、むしろエルザに怯えているようだ。

ナナシが無意識に怯えていると、嬉しそうに微笑んでいるエルザは一振りの巨大なハンマーを手に取る。

「うむ、まずはこのハンマーで、ふん！」

そして躊躇なく目の前にいるナナシに目掛けて振り下ろした。

【バゴンッ！】「危なっ！？」

ナナシは当たる寸前に、ギリギリ回避し転がった。

「……無茶苦茶だ……」

元の場所を見ると、見事に地面は凹んでいた。

「逃げるな！」

「逃げるな！じゃねぇよ！殺す気か！それに頭を叩いて記憶が戻るわけがないだろうが！」

「大丈夫だ。これは魔法剣の一種だからな。頭に衝撃を与えるだけだ」

「死ぬよ！？」

「そうか？グレイは大丈夫だったぞ？」

キョトンとして聞いてくるエルザにナナシは深く溜め息を吐く。

「グレイとやらが誰かは知らないが、止めてくれ」

「むぅ、仕方ないな」

「まずは落ち着け。大体、本音を言うとだな。私はな、無理矢理、記憶を思い出そうとは思っていないぞ」

「何故だ？大切な記憶があるかもしれないのだぞ！」

「今の私はナナシだ。記憶なんざ、何時か思い出すさ」

エルザの疳高い声が上がり、それに耳を抑えた後、ナナシはぶっきらぼうに答えていた。

「お前は自分が何者か知りたくないのか？」

「私はナナシなんだ。ナナシ・ネームレスという一人の人間なんだよ」

「意味が分からないぞ！」

「分からなくて結構」

それから何度も押し問答があったが、

「分かった。お前が言うんだ。仕方ない」

結局、溜め息を吐いたエルザが折れ、ナナシの記憶のことは以後、口出しをしなくなったのである。「だが、記憶関係じゃなくても困ったことがあったら私を頼れ。言いな？」

「ん？いいのか？」

「当たり前だ。困ったら何時でも頼ってくれて構わない。なんせ私達は今日から友だからな」

「友……何時でも頼っていい奴のことなんだよな。分かった。覚えておこう」

「うむ、今日からよろしくな♪」

「あぁ、よろしく」

その返答にエルザは満足げに頷いていると、ナナシが分厚い本を差し出してきて喋り出す。

「ではさっそく。エルザよ、薬草を探せ。円月草だ。いいな？」

「……何？……」

「私は薬草を見つけきれなくて困っているんだ。早く探してこい。あーあと、腹が減った。果物を取ってこい。それに……」

エルザに本を押し付けているナナシは、友のことをパシリか何かと認識していたようだ。

先程の怯えは何のことやら、ナナシは調子に乗り喋り続けたが、その勢いはすぐに止まることとなる。

「明日から私の代わりに薬草を採集しろ。おぉそう言えば肩がだるいな。友よ、肩を揉おわっ！？」

「お前は友と言う言葉を履き違えているようだな。友になる前に教育が必要のようだ。来い！エルザ先生がみっちり教えてやる！！！」

「痛い痛い痛い！？なして！？」

ナナシの言葉に怒りで肩を震わせていたエルザは、ナナシの首根っこを力強く掴む。

「こら！大人しくしろ！」

そして抵抗するナナシを引きずり森の奥へと消えていった。

その後

「只今戻りました」

「友は対等な関係、対等な……」

すっきりとした笑顔のエルザと顔面蒼白で円月草片手に、ぶつぶつと呟いているナナシが帰ってきたそうな。

「あぁ、ナナシ。これから毎週、私が休みの日はレッスンだからな。みっちりお前を鍛えてやる」

「ひぃ！？」

記憶（後書き）

ハイテンションなナナシが、少しハイテンションなナナシに落ち着くまで後、数話ある予定かも。

まだまだガキですからね。

あと今まで、ナナシが記憶を思い出したいと言っていたのは、ナナシが仕事から逃げる口実でした。今回のが本音です。

年齢（前書き）

本作品は～影～の時に必要ないかなと思い、飛ばして書かなかった設定話やエルザ達との出会いを書いています。

今回は年齢の話。

年齢

現在は夜である。

何とか円月草を採取して来た私は無事に夕食を食べることが出来た。

その夕飯中に爺さんから聞いて驚いたのだが、婆さんは何と高位の治癒魔導士らしい。

ただの薬草大好き婆さんではなかったようだ。まさか、こんな近くに魔導士がいたとは……。

ちなみに、今は夕食も食べ終わりソファーでゆったりとしている。

私の後ろには椅子に座っている爺さんとエルザがいる。何でも今夜は泊まっていくんだと。

婆さんは人間嫌いのはずなのだが……と夕食中に疑問に思っていた所、爺さんが囁き声で教えてくれた。

どうやら病人には比較的優しいらしい。

ちなみに、別室で今も婆さんは爺さん用の薬を作ってるため嘘ではないだろう。

ふむ、病人には優しいとは新事実だ。

そしてよくよく考えてみる。

人間である私がここで生活出来るということはだな。
……つまり、つまりだ。婆さんにとって私は病人なのだ……
「ナナシよ。少し尋ねたいことがあるのじゃが……」
信じられない！？私は病人ではないぞ！
もしかして記憶喪失のことが病気なのか？
しかし婆さんには散々言ったはずだぞ。私自身は記憶喪失ではないと……。
ちゃんと理解してくれていたはずだったんだが……それでも私は病人と見られているのだろうか？

「ナナシ！って聞いておらんの」
「マスター、私がしましょうか？ナナシの扱いは大分理解したつもりです」
「……早いのぅ。まだ会って1日も経っておらんぞ？」
「意外に単純な性格でしたので」
「それよりさっきから何をしておるんじゃ？」

「ナナシの教育を明日から行うので計画書を書いています！」

「さっき、ポーリュシカから頼まれたやつか」

「はい。どうせ私も勉強しないといけませんので、そのついでに教えていこうかと」

後で、婆さんにしっかり私のことを伝えておこう。

だが今、動くのは嫌だ。今日の疲れを癒しているからな。

今日は婆さんと出会った時並みに忙しかったのだ。久しぶりに活動した日と言えよう。

まぁ、こんなにゆったりとして居られるのは、エルザが薬草採取に協力してくれたおかげだ。

エルザの助言のおかげで薬草を見つけることができたからな。居なかったら今日はヤバかったかもしれない。

ちなみに、円月草に似た雑草がまさにそれだったのだよ。

あれは驚いたな。本当にエルザには感謝しないといけないな。

ただ、エルザ先生の授業は今夜限りで終わりにして欲しい。あの授

業はスパルタすぎる。

こう、ずばーん！と凄く大変だったのだ。

ずばーんだぞ！ずばーん。

そしてずどーんだ。

「聞いておるか！ナナシ！」

こう、ずどーんって

「ナナシ！！！」

むっ？背後にいた爺さんが何やら話し掛けてきたぞ。

「うるさいな。声のトーンを落とせ。婆さんに怒られるぞ」

「ようやく気づきおったか」

呼ばれたので振り返ってみると、案の定、爺さんが此方を見ている。

だが呆れ果てたような顔だ。

ふむ……自分の風邪ひき具合に呆れ果てているのだろう。
まぁジジイだからな。風邪でぽっくり逝く可能性もあるし、風邪を引いたことを反省しているのか。
さて、そんな爺さんよりも気になったのは視界の端に写るエルザの方だ。
「むぅ。ポーリュシカさんから渡される本の量から……やはりナナシには毎日勉強させないといけないようだな」
エルザは真剣な顔で何やら呟いている。
しかし初めてしっかりと顔を見たな。意外に真面目な顔は凛々しくて可愛い……。
はっ！？私は何を馬鹿なことを考えているんだ。
あれを可愛いとは私の目は腐っているんじゃないのか！？
そんなことを思考しながら立ち上がってエルザを見てみる。
どうやらエルザはテーブルに大きな紙を広げて何やら書いているようだ。
何だか悪い予感がするのは気のせいだろうか。

「お主は何歳じゃ？」

おっと、爺さんと話していたのだったな。

ふむ、年齢か。しいて言うなれば一才にも達していない。

しかしまぁ、爺さんにあのことを言っても意味はないので……確かエルザが１２歳だったか。ならば私は

「２４歳だ」

「何だと！？有り得ないぞ！」

むっ。何でエルザが話に入ってくるんだ。しかも何だ、その驚いた顔は？

「私より身長が低いじゃないか！」

「何言ってんだ。私は２４歳だ。てか身長で決めてんじゃねぇぞ！」

「いや有り得ない」

何て失礼な奴だ。確かに私の身長はエルザより低い。

しかし、しかしだ。私も成長している。この数ヶ月で１３０を越え

たんだ。エルザなんぞ、すぐに追い抜いてやる！

だから年齢はエルザより二倍の２４歳で問題ないはずだ！

「お前はどう見ても私より年下だ！」

「馬鹿野郎！私は２４歳だ！」

「ナナシよ。お主はせいぜい８～１２歳が限界じゃぞ。２４歳はちょっとのぅ」

ジジイもか！？呆れた顔で此方を見るな！てか

「エルザより年が低いわけがないじゃないか。私をバカにしないでくれよ……」

「何だと！？」

「その自信は一体どこから来るのか不思議じゃのぅ」

……

……

……

その後も売り言葉に買い言葉が続き、言い争いは熾烈を極めた。
何故か意固地になったナナシとエルザが考えを改めることはなかったからだ。

「何の騒ぎだい！」

「おぉ、ポーリュシカ」

だが、薬の調合からポーリュシカが帰ってくると状況は一転した。

「婆さん、聞いてくれよ。私は２４歳だよな？」

「いえ、ナナシは私と同じ１２歳か、それより下です！そうですよね？」

新たにやってきた訪問者に近づき、絶対の自信を持って喋り掛けるナナシとエルザ。

だが額をピクピクと震わせていたポーリュシカは二人を冷たい目で見る。

「「「ひっ！？」」」

その目を向けられた二人と何故かマカロフまでも小さく悲鳴をあげる。

まるで蛇に睨まれた蛙のようだ。

「一体、何時だと思っているんだい！」

そう言い放つと躊躇することなく、拳を握った状態でナナシとエルザの頭を叩いた。

「「……痛い……」」

「夜遅いのに騒ぐんじゃない！」

「ちげぇよ。騒いでるんじゃない。私の年齢をだな……」

「あんたは１２歳で決定だ。反論は認めないよ」

「そんなぁ！？」

「それよりもあんたは風呂を掃除してきな！」

「理不尽だぁ」

結局、ポーリュシカの言葉でナナシの年齢は決まってしまった。

反抗すれば、ご飯抜きが待っていると理解したナナシは逆らえず、落胆しながらと風呂場に向かっていく。

「……私は12歳なのか……」

「やはりな。今回の勝負も私の勝ちのようだ。ふふっ」

一方、エルザは腕を組み、ナナシを見て不敵に笑っていた。

だが

「あんたの方は終わったのかい？」

「……まだです……」

ポーリュシカの矛先がエルザに向かうと、タジタジと言葉を喋るだけ。

どうやらエルザもポーリュシカは恐いようだ。

「だったら早くおし。あんたがしたいって言いだしたんだよ」

「さ、早急に終わらせます！」

そう言うと、急いで椅子に座りテーブルにある紙と睨めっこし始めた。

「さすがはポーリュシカじゃな……恐ろしのぅ……」

そんな一部始終を見ていたマカロフがそう呟く。
だが、まさか自分にも矛先が来るとは考えていなかったのである。

「何、ボケッとしてんだい。マカロフ？」

「わ、儂か！？儂は何もしておらんぞ！？」

「何もしてないのが問題さ。あんたが居たのにどうしてこの子達が騒いでいるんだい？ちょっと来な！」

「や、やめっ！？」

ポーリュシカに襟首を掴まれたマカロフは、ナナシのように引きずられ部屋の奥へと消えた。

「マスター、ご愁傷様です」

リビングではそう言いつつも、ペン片手に手を動かすエルザが居たとか。

喪失者（前書き）

今回は混乱しているナナシ視点が多いので読みにくいと思います。

喪失者

風呂掃除完了だ！

後はお湯を蛇口から出して待つだけだな。

白銀色の蛇口を捻ると勢い良くお湯が出てきた。

木製の浴槽にリズミカルな音を鳴らしながらお湯が溜まっていく。

それと共に蒸気が舞い上がり、広い浴室に湯気が立ち込め始めた。

うむ、湯気で前が見えない。さっさと別室に移動しよう。

ちなみに、ここの湯の元は温泉だ。源泉を引いて、直接お湯として使っているため非常に熱い。

だから入るときには注意が必要だ。水を足さなかったら死んでしまうからな。

さて、そんなことより早く自室に帰って瞑想するか。

「むっ。やっと出てきた。遅いぞ」

「お前、何やってんだ？」

浴室から出ると、そこにはエルザが佇んでいた。腕を組み、何やら嬉しそうに微笑んだ顔で喋り掛けてくる。

「ふふん♪1日だけだが完成したんだ♪」

微笑む顔が少しだけ可愛いなと思ってしまったが、コイツの笑顔は恐ろしいことの前触れのような気がするな。

「完成？何の話だよ？」

「明日からの勉強の話だ！」

「勉強？何だそれ。お前のレッスンなら来週だろ？（来週は森の奥に逃げよう）」

「私のレッスンとは違う物だ。夕飯時、ポーリュシカさんの話を聞いていなかったのか？」

私の返答に対してエルザは微笑みから一転し、憐れみを浮かべたような目で此方を見てくる。何て失礼な奴だ。

「勿論、聞いていたさ」

「嘘だな」

「聞いていました！」

「じゃあ、ポーリュシカさんが何を言ったのか言ってみろ」

そ、そこまで聞いてくるのか。夕飯時、夕飯時……確か婆さんは……あぁ思い出したぞ。

「風邪を引いてしまった爺さんを怒っていた！どうだ、覚えていただろ？」

「……確かにそうだが、それはナナシには関係ない話だ」

そう言うや否や、エルザは溜め息を吐く

（やっぱりコイツは1人には出来んな。人の話は聞かない。薬草採取も適当。戦闘も弱い。ふむ……ダメダメではないか！？鍛えねばすぐに死ぬぞ！？）

「私と出会えてよかったな。明日から修正してあげよう」

何を言ってるんだ。話が見えない……てか肩に手をおくな！何か子供扱いされていないか？

私とお前は同い年に決まったのだぞ！

「ではナナシ。明日から始まる計画の概要だけ説明してやろう」

…

…

…

ナナシ教育計画だと！？

あの婆さん！ふざけたことを始めやがった！

何でも一年間、薬学や魔法などの勉強をしないといけないらしい。

私が婆さん無しでも生きれるようにするための措置らしい。

エルザに聞いても、らしいらしいで、よく分からないので婆さんに直接聞くしかない。

と言うことで私は婆さんの私室を訪ねるところだ。

「婆さん！どういうことだ！」

婆さんがいる私室まで急ぎ、ノックもせずに扉を開けた。

「待て、ナナシ！」

背後からエルザが付いてくるが、部屋に入らせないために扉を無理矢理閉める。

『むっ！閉めるな！私も……』

何やら声が聞こえてくるが、それよりも婆さんと話をしないといけないのだ。

部屋の中には婆さんが1人で作業をしている。薬でも作っているのだろう。

「どういうことだよ！私は勉強なんてしたくないぞ！」

「ピーチクパーチクうるさい子だね」

婆さんはうんざりとした表情と態度を隠そうともせず、私の方へと振り返る。

「それじゃあ聞くよ？あんたは何かしたいことはあるかい？」

「……」

私はピタリと腕を止めた。何故腕を止めたのか、自分では分からない。

ただ固まっている私に婆さんは続ける。

「この世界に、この時代に生きているのなら何をしたいのかと聞いているんだよ。毎日寝て食ってグータラしているあんたは何をしたいんだい？」

「……飯を食いたい……」

「それはすることがそれしかないからさ。食事以外に何かしたいことはあるかい？あぁ……グータラな行動は却下だよ」

「むぅ」

何をしたい？いきなり、そんなの聞かれても分からねぇよ。

食事は好きだ。グータラするのも好きだ。しかし婆さんは、それは駄目だという。

ならば、それ以外に私は何をしたい？

…

…

…

う〜む

何かしたいこと？

しいて言うならば私は生きたい。ただ、ナナシ・ネームレスとして生きたいだけだ。

私が記憶喪失者なら記憶を思い出したいと思うだろう。

記憶を取り戻したいと躍起になって、自分を知っている人物を探しにいくだろう。

だが私はナナシ・ネームレスだ。断じて記憶喪失者何て奴ではない。

確かに、この身体の前の持ち主は記憶喪失者なのかもしれない。

ソイツには楽しい記憶があったかもしれない。

悲しい記憶があったかもしれない。

何かすべき任務があったかもしれない。

思い出さなければいけない何かがあったかもしれない。

だが、私には関係無い。

ソイツが誰なのか、何者なのか、どんな人間だったのかなんて知らない。

知らないヤツのことなんか考えようもないのだ。

私は知らない。何も知らない。唯一、この時代と一致するのは魔法と一般知識のみ。

しかし、それはソイツを体現しているのではない。

この知識も魔法も、私が産まれた時から覚えていたものだ。

断じてソイツの記憶じゃない。今考え、生きている私の記憶だ。

ゆえに私とソイツは既に別の人間である。

つまり、私が自分の人生を割いてソイツを思い出してやる義理など微塵もないんだ。

ソイツがソイツ自身を思い出すまでは、この身体は私の物だ。

私のために成長し、私のために存在する身体。

ゆえに私は一人の人間なんだ。

ナナシ・ネームレスと言う漆黒の背広を纏った白髪に赤目の人間な

んだ。
ソイツは何時か現れる。ソイツが記憶を思い出すことによって……。
その時、私と言う存在はソイツと言う存在に消されて死ぬだろう。
しかし、その時まで私がこの身体の主なのだ。
「今の私はナナシ・ネームレスと言う人間だ！」
まるで自分に言い聞かせるように腕を振りながら私は叫ぶ。
しかし、すぐに疑問が私を襲った。
じゃあ私は何をしたい？
婆さんの言う通りナナシ・ネームレスは何をしたいんだ？

「もう一度聞くよ。あんたは何かしたいことはあるかい？」
「……ないかもしれない……」
この世界で、この時代で、私は何をしたいんだ？
ただ惰性に生活をするのか？せっかく生きているのに？
しかし私はグータラすることが好きだ。だが、それは婆さんが居て

こそ出来ることだ。

婆さんが死んだらグータラに過ごせるのだろうか。

いや無理だな。飢え死にや路頭に迷うのは目に見えている。

しかし何をすればいいんだ？私は何をしたいんだ？

「やりたいことなんかわからねぇよ」

私の小さな呟きはお構い無しと、婆さんはふんっと鼻を鳴らし喋り始める。

「まぁ、それが当たり前さ。誰もが産まれた時からやりたいことがあったら苦労はしないよ。それを知るために勉強をするんだ」

「知るために勉強？」

「そうさ」

そこで一呼吸置くと再び婆さんは話し出す。

「あんたは毎日グータラに過ごしてきたんだ。やりたいことなんて考えたこともなかったろうね。でもだからこそ、今は理解出来るは

ずだよ。ただ黙っていても、空を眺めていても、何も進まないことをね」

「……じゃあどうすればいいんだよ……」

「さっきも言ったじゃないか。まずはやりたいことが見つかるまで勉強をしてみな」

「……むぅ……」

「勉強をしておきさえすれば、やりたいことが見つかった時に必ず助けになるはずさ。やりたいことが見つかった時に後悔はしたくないだろう？だから勉強はしておきな」

「勉強……か」

釈然としないが婆さんが言うんだ。一応やれるだけやるか？

しかし勉強をしたからと言って、やりたいことが見つかるのだろうか？

いやいやいや、勉強はあくまで何かしたいことを見つけるための猶予期間であり……むぅ？訳が分からなくなったぞ？

そう言えば、この勉強は私が独り立ちできるようになるためのものらしい。

つまり勉強すれば何かしたいことが分かるかもしれないと言うこと

だよな。

だから勉強をしておけば、婆さんが居なくても路頭に迷わないかもしれない。

そう言えば、私は知らないことばかりだ。

この森が大陸のどこにあるかも知らないのだ。

うむ、そうだな。まずは勉強をしてみよう。

知識や魔法を貪欲に習得して独りで生きれるように頑張ればいいじゃないか。

そうすればやりたいことも見つかるだろう。

グータラに生きることは何時でも出来るしな。

頑張ってみるか。

…

…

…

婆さんに礼を言った後、すぐに部屋を出た。

決めたら即行動だ。やるならしっかりとやらないとな。

「エルザ、明日から私は頑張るよ」

「そ、そうか（部屋で何があったんだ？別人のようじゃないか！？）」

「あぁ、よろしく頼む」

何やら驚いているエルザはさて置き、計画書をきちんと見るか。何をするか見ておかないとな。

何々、朝は知識系。昼は運動系。夜は薬学系と言ったところだな。

ふむ、ふむ、なるほど。

つまり自由時間は食事と風呂と寝る時だけと言うことか。

よし明日から

「やってられるかぁ！？」

こんな紙切れなんぞ、どっかに飛んでいけ！

「あっ！私が書いた計画書を投げるな！」

てか、ハードスケジュールすぎじゃね！？自由時間がないじゃねぇか！？

「あぁ、紙に皺が。せっかく綺麗に書けていたのに……ナナシのバカ……」

「なぁ？エルザ」

「……なんだ？……」

紙切れを拾い、少し涙目になっているエルザに……何で涙目になっているんだ。

まぁいいか。とにかく私はエルザに問い掛けた。

「どれか減らさないか？私は何かを見つける前に過労で死んじまうよ？」

「駄目だ。絶対、計画書通りやるからな！」

「絶対？」

「絶対の絶対だ！お前は男だろう！一度決めたことは貫き通せ！」

「うへぇ」

明日から大変な日々が続きそうだ。うむ、辛かったら逃げることにしよう。

喪失者（後書き）

補足

ナナシは記憶喪失者とは別の存在と考えている。いや考えたいと言う話。

それと混乱しながらもポーリュシカに言われた通り勉強を頑張ろうと思い立った話。

読みにくかったですよね。混乱の描写は難しいです。

記憶関係は今回で一端収束します。

展開遅すぎますかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4195z/

名無しの影使い

2011年12月21日18時48分発行